

[講演要旨]

和漢年代記の改訂・増補と地震記事 — 『倭漢皇統編年合運図』を中心に —

片桐昭彦(東京大学 地震火山史料連携研究機構・地震研究所)

§1. はじめに

和漢年代記とは、日本・中国の皇統や王系等を年表形式で対照して見られる年代記のことである。本報告では、その和漢年代記のうち『倭漢皇統編年合運図』の地震関連記事を考える。『倭漢皇統編年合運図』は、慶長5年(1600)に京都要法寺の円智日性による編集刊行以後、改訂版・増補版など近世を通じて随時出版され、全国に流布したため、18～19世紀に各地で年代記を作る際の典拠として多く用いられている(矢田2005ほか)。

§2. 『倭漢皇統編年合運図』の分類と改訂・増補

『倭漢皇統編年合運図』各版を出版年・編著者および地震等の記事を中心に照合すると、次のA～Dの4つに大きく分類できる。

(A) 円智撰のもの(慶長年間に七版あり、漢文体)、
(B) 吉田光由編集のもの(正保2年(1645)版が最古か、Aの漢文に訓点を付すが記事内容は同じ)、
(C) 円智・吉田光由撰集のもの(延宝2年(1674)版が最古か、Bを踏襲するが記事を改訂・増補)、
(D) 円智・吉田光由撰集のもの(享保4年(1719)以後か、元禄7年(1694)版をそのまま用い追加年次分記事を随時加筆)である。正式な出版書名は、Aは『重撰倭漢皇統編年合運図』、B～Dは『指掌倭漢皇統編年合運図』である。

本報告でとりあげる『倭漢皇統編年合運図』の改訂・増補とは、新版ごとに追加される年次分の記事のことではなく、従来の記事に施されたもの、すなわち同書の最古出版年の慶長5年以前の記事における改訂・増補のことである。したがって、上記のA～Dの分類で言えば、A・Bの記事からCへの改版、少なくとも正保2年(1645)から延宝2年(1674)までの間に改訂・増補された記事に注目することになる。

§3. 改訂・増補された地震関連記事

改訂・増補された記事のうち地震関連のものは、天平17年(745)「天下大地震」、貞観11年(869)5月「奥州大地震」、天慶元年(938)4月15日「大地震不止」、治承3年(1179)7月「將軍塚動ス」、建保元年(1213)正月元日「大地震」、正応元年(1288)4月「大地震」、正中元年(1324)11月21日「大地震」、竹生島崩半入湖」、元弘元年(1331)7月「二二大地震、紀州千里浜陸地」「同七二大地震、富士山数百丈崩」、貞和5年(1349)8月「八幡鳴動」、延文5年(1360)4月12日「住吉社鳴動」、永享4年(1432)9月16日「大地震、山崩、相州大山寺二王ノ頭地ニ

落」、寛正6年(1465)9月13日「鳴動」、明応4年(1495)8月15日「鎌倉大地震」、永正7年(1510)8月27日の「遠州今切崩出」、天文16年(1547)2月3日「白山焼」の16件が加筆され、永正9年(1512)6月「大地震」の1件が削除されている。

加筆された記事を見ると、奥州、竹生島、紀州千里浜、富士山、相州大山寺、鎌倉、遠州今切、白山など、京都以外の地方各地のものが多いことが注目される。そして、これらの地方の地震関連記事の情報源が、少なくとも延宝2年以前、近世前期以前の文献・史料に拠るものである点は重要である。

§4. 改訂・増補したのは誰なのか

Cには円智・吉田光由撰集と記すが、円智は慶長19年(1614)、吉田光由は寛文12年(1672)にすでに死去しており、Cの改訂・増補の実際は別人の手によるものである。誰が何を典拠として行ったのであろうか。Aの円智、Bの吉田光由はいずれも京都に居住していた点、およびCの加筆に地方各地の記事が多くなる点を考慮すると、京都だけでなく日本全国に通用する年代記にしようとする意図がうかがえる。その視点で正保2年から延宝2年までの間に編纂された日本の歴史書を勘案すると、寛文10年(1670)に成立した『本朝通鑑』が注目される。『本朝通鑑』は、幕府が林羅山・鷲峰父子らに命じ、神代から慶長16年(1611)まで正・続編等310巻におよぶ歴史書である。

照合すると、Cで加筆された記事は、年月に異同のある記事2件と天文16年の「白山焼」記事1件以外、すべて『本朝通鑑』に記されている。すなわち『本朝通鑑』が主要な参考文献であった可能性を指摘できよう。しかし、『本朝通鑑』は写本のみで伝来し、出版されなかったため、その内容を知るのは幕府の一部や、編纂した林家のみであった。したがって、彼らや彼らのもつ情報源がCの加筆に何らかの大きな影響を与えたと考えられる。

§5. おわりに

Cの加筆記事については、『本朝通鑑』の記事の典拠にさかのぼって研究すればよい。一方、改訂・増補以前のAの記事の典拠については、蓬左文庫所蔵(駿河御譲本)の『重撰皇統編年合運図』写本2冊をその原型にみる研究もあるが(湯谷2011)、蓬左文庫本をAと照合すると、地震記事だけみても、天平6年(734)、仁和3年(887)、貞元元年(976)、文治元年(1185)、明応3年(1494)の記事が記されないことから、直接的な原型とするのは難しい。